
林檎の尻尾

Y N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

林檎の尻尾

【Nコード】

N9906F

【作者名】

YN

【あらすじ】

尻尾のついた林檎を夢の中で見つけたらそれはアリスが兎を追いかけたように不思議の国へと繋がる始まりの合図そんな夢をみた林檎の尻尾にまつわるエトセトラ

林檎にまつわる恋の話

深い眠りについたらとき、たぶん私は林檎リンゴの尻尾しっぽを掴んだ。

そう、あの真つ赤な林檎に尻尾が生えていたのだ。黄色でふさふさとしていた尻尾。ああ、あれは富良野ふらのでみた狐か。と、それは夢の中での話なのだが、起きてから私は思うのだ、『富良野になんか行ったことがない』と。でもその起きたというのもまた夢で、私は目覚しの代わりにセツトしていた、深夜番組の主題歌で春の暖かい午後に自分自身を取り戻した。夢から覚めたあと、私はなんとも言えない虚無感きよむかんに襲われる。それを世間では寝ぼけていると言っただろうが、私は寝ぼけているわけではない。携帯のボタンを長押しして、私はまた林檎を追いかけたいと強く思った。林檎はそれ程好きでもなかったが、あのふさふさとした黄色の尻尾は、遠い過去に私がつけていた尻尾ではないのか。それを夕方から会う恋人に言うと、彼はきつと優しい顔で笑うだろう。（この辺り、私は世間で言う「寝ぼけて」いたのだ。次に起きたときは彼と会う約束の時間だった）

「ごめんね。忙しかったのに…」

「いいよ、昨日は夜だったんだろ？」

彼は二度寝する前に私の想像した通り、優しく笑って言った。もちろん、違う場面でだが。ちなみに夢の話をする楽しそうにきいてきた。私たちは傘を差しながら手を繋いで、水たまりを避けて歩く。彼の隣は落ち着く。静かな雨のような人だった。付き合う前にそう言ったら不思議そうな顔で「え？」と聞き返し、私がもう一度耳元で「静かな雨のような人ですね」と言うと、「そういう表現が好きなの？」と聞いてきた。質問で返ってくると思わなかった私は次に言おうとした言葉が続かず、沈黙してしまった。彼はその間を苦痛とも思わないようだった。私が返事をする前に彼は「そうだね」と考え込み、「原さんは台風みたいだね」と、悪気のない

ような顔で言ったのだ。(悪気がない、と表現したのはその「台風」が私にとっては悪いイメージだったのだが、彼は違ったらしい)「…台風？」私がそう言つと、慌てて彼は言った。「悪い！そういう意味じゃなくて、」

バシヤン。と音がして私は彼のほうを見た。スーツ姿の彼は立ちまつたと言わんばかりの顔で足元を見た。

「あゝ…濡れた」

「何考えてたの？」

「ん、…風強いなあって」

彼は風が好きだった。それもうんつと強い風が。そう言えば林檎の尻尾を掴むとき、私も風があればいいのにと夢で思った。追い風がふいて、上手くいけば、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9906f/>

林檎の尻尾

2010年10月14日13時36分発行